

貫から始めた。しかし「ボンコツ」「モギトリ」など部品商売や家内事業的な形態に馴染んだ先発業者がゴマンといるなか、超大型の輸入プラントによる機械処理を引っ提げて新規事業に乗出すのは、当事者にとっても周辺関係業者にとっても、池の中で鯨を飼うような芸当だったろう。多屋は「辛惨・辛苦、倒産の瀬戸際に立たされ」、「明日の支払いも滞り、邸宅も売り払い、工場のバラック2階」に引っ越す苦境にさらされた(増井重紀・「鉄屑ロマン」)。それでも明日を信じた。

その発言と活動の足場となったのが、75年に発足した日本鉄リサイクル工業会・シュレッダー委員会だ。多屋は初代委員長として精力的にその打開に取組み、持ち前の弁論・論理で業界世論の喚起に奔走した。

多屋は欧米の先進例を求めて世界を駆け巡った。「彼ほど世界の鉄屑業界に友人、知己を持っている人はいない。世界の鉄屑業界で彼が一番の国際人。少なくとも『シュレッダー』の知識と友人、知己の数に関しては、彼の右に出る者はいない」「彼ほど世界のシュレッダー工場を見て回った者はいない」。彼は「スイスに留学し独語、英語はお手のもの、仏語もこなした。唯一できない語学は東京弁でどこに行っても河内弁丸出し」。「海外出張は風呂敷ひとつ。これ一つで30日旅行」(同)した世界の有名人だった。2009年11月死去。享年75

山根 清義、義照 親子(山根商店)

一日本初の本格ギロチン機を導入、運営

日本の鉄スクラップ大型・機械による高速処理と複数の大型ギロチンの組み合わせによる効率稼働体制は、沖縄出身の堺市民の挑戦によって最初の一步を踏み出した。

▽山根清義＝沖縄県与那城町伊計島に1922年(大正11)生まれた。15歳で大阪に出て、49年(昭和24)大阪府堺市海山町の自宅で起業した。54年には早くも水圧プレス、55年には出入荷回転の高速化のためリフマグ付きクレーンを設置。同じ海山町の現在地に本社を移し、株式会社に改組したのが59年。

鉄スクラップの機械処理といえば小型プレス機しかなかった64年、日本で初めて本格的な370トンの圧門型シャーを導入した。門型シャー

を指して「ギロチン」との呼称が登場するのは、山根ヤードの紹介記事が最初である。

▽ギロチン導入＝「アメリカの業者も驚いた一ギロチン・シャーの威力」。リフマグ付き天井走行クレーン(5ト)、弾丸プレス2基も備え「アメリカにもこれほどのヤードはない」と言わしめた(65年6月特集号29p)。

清義社長自らが日商岩井社員と共にドイツのリンデマン社に赴き購入したものだ(日本製のギロチンが登場するにはこの6年後)。

さらに72年には500トンの圧機、74年には750トンの圧機を導入して画期的なギロチン3基体制による高速処理モデル工場を作り上げた。

また間口250m、奥行き66m、総面積16,500㎡の単一ヤードとしては当時、日本最大の機械化処理工場に仕上げた。

ギロチンも81年には1,000トンの、85年には1,600トンへ更新。日本の近代ヤード設備導入と複数機の連携処理は山根商店を原型とする。▽郷里沖縄のために＝山根は55年(昭和30)ごろから米軍統治下にあった郷里の伊計小中学校へ野球道具を贈ったのをきっかけに伊計島や与那城町へマイクロバス、育英資金原資などの寄付を続けた。「島の人たちに役立ててほしい」と集会室を備えたコミュニティ施設「憩いの家」も贈った。マッサージ機や舞台のどん帳などの備品も含め総額で2,230万円。贈呈式で山根は「村や島のためになれば」とその思いを語っている(琉球新報02年10月記事)。2010年12月死去、享年89。

▽山根義照＝1949年生まれ(08年社長就任)。義照は先代の死去後、屋内ヤードとしては最大規模(建屋13,200㎡)の収容能力を引き出すヤード「再生」に踏み切った。

従来、間口250m、奥行き66mの広大なヤードは、各棟(幅30m)とも、奥半分は材料置き場とされ、ほとんど死蔵状態に近かった。

義照は、材料置き場を撤去し、その跡に各棟を横断するトレーラー通路を確保。次いでプレス、ギロチン機上空を走る天井走行クレーンの延長上に、このトレーラー通路を両側から挟む形で「処理済み品」ストック専用の大型枀(ます)(1辺10m超、高さ＝トレーラー車高並)を、13ブロック整然と並べた。

このレイアウト変更から、持ち込み材料は

ストックすることなく直ちに処理。処理済み品は専用枀に降ろすだけで、「在庫仕分け」と同時に「製品管理」が完了する、極めてシンプルで経済的な運営システムを作りあげた。

矢追 欣爾(大阪故鉄)

一戦中・戦後の語り部、西の論客として

矢追欣爾の遺稿集が2001年2月(平成13)矢追徹夫・隆兄弟を発行人に「鉄のひと 水のひと」との表題で刊行された。

矢追欣爾は1918年(大正7)大阪市西区江戸堀に生れた。父は死者26万人を数えたスペイン風邪に罹患、出張中の台湾で待望の男子誕生を知らず死去した。

母の実家、徳島で矢追は高等小学校を卒業し、34年大阪の合資会社浪華商会に入った。丁稚奉公のかたわら西区商業青年学校に入学(定時4年制)、経理・簿記を修得したことが軍隊生活やその後の企業人生に幸いした。39年から41年まで現役兵として野砲隊。

日米開戦前の41年に除隊。浪華商会に復帰し回収団の一員として金属統制会社に出向した。42年5月、指定商と回収団を統合し関西金属回収協が設立され、個人営業が停止されたことから、正式に金属回収会社に入社。回収団生え抜きとして産業設備営団関係の遊休設備の非常回収に従事した(業務部主任)。敗戦から金属回収会社の解散が決まった46年2月28日退社。戦後は46年3月、矢追商店を開業。52年1月大阪故鉄株式会社に改組し、関西を代表する有力鉄屑業者として活躍した。

主な役職・褒章は84年鉄屑工業会副会長・同関西支部長。82年紺綬褒章(中小企業振興功労)、89年春の叙勲で勲五等瑞宝章受章。

* * *

矢追は業者座談会では無くてはならない人だった。戦前戦後を一貫するキャリアに加え、正確緻密なデータを持参し座談の軸を支えた。

没後の13年(平成25)に業界紙主催で業者、商社座談会の席上、鈴木孝雄・元日本鉄リサイクル工業会第3代会長が、業界活動の経緯を紹介するなかで、矢追の貢献に言及した。「設備機械が業界に本格的に導入され急速に装置産業化するのが80年代後半から。それまでのコスト分析に関して言えば、関西の矢追